

第25回大学教育研究フォーラム
追大アサーティブ追跡研究 中間成果報告：多面的評価と選抜効果

6. 総括として

キャリア形成・開発の視点を入試という節目にどう仕込むのか

池田 輝政
追手門学院大学

2019年3月23日（土）
於：京都大学吉田キャンパス

総 括

高校生の 『キャリア成熟』

を促すことの大切さが
共同研究から見えてきた

これまでの日本の入試接続が
こだわってきたこと

『知的成熟』の視点



5 教科学力のなかの達成度
(教科学力の多様性を認めてきた)

これまでの日本の入試接続に
欠けていたこと

『キャリア成熟』の視点



「自己を知る力」

「学び方を知る力」

「プランニングを行なう力」

のキャリア形成力

追大アサーティブが 教育接続となり得たのは二つの強み

1) 『キャリア成熟』に面談法と面談力が機能した

面談力とは：キャリア形成・開発の視点から、アサーティブ志望者がこれまでをバックキャスト（再帰的にこれまでを想起し経験の意味を見直す、振り返りによってこれまでを想起し経験の連続性を捉え直す）して、自己の現状を俯瞰しその先を展望する機会を与える方法として捉えることができる。

2) 『知的成熟』を教科フリーの基礎学力テスト（マナボス）として公開し、習熟の程度を公平に評価した

マナボス＝言語テスト・非言語テスト・問答式テスト（追大バカロレア）

課題：
追大アサーティブが
高大接続のモデルとして普及するには

- 1) 『キャリア成熟』の概念を高大の教育プログラムに取り入れる発信をする
- 2) 『キャリア成熟』を促し可視化する方法の知を実践知として伝えていく
- 3) 『知的成熟』のテスト問題の妥当性・信頼性を明確にし、達成水準のベンチマークを明確にする

総括の関連データ

学びと成長を可視化する目的と方法論

目的/方法論	(1)多面的・数量的に捉える	(2)同一集団を追跡し入学時点のある定点において定量的・定性的に捉える	(3)指導・助言や支援に生かす潜在的な問題をタイムリーに捉える
1 アサーティブプログラム・アサーティブ入試で想定する受験生像がどの程度実現されたのかを知る	①ベネッセi-キャリアの「大学生基礎力レポート」を活用		
2 アサーティブプログラム・アサーティブ入試を合格した学生の学びと成長を知る		①H16入学生追大データを活用 ②ベネッセi-キャリアの「大学生基礎力レポート」を活用 ③特定学生の面談調査活用	①特定学生の面談調査活用

アサーティブ入試の面談サービス力をもつ職員スタッフの育成に取り組む。

各指標別/実施年度別	2014年	2015年	2016年	2017年度
①面談職員数	32	53	61	58
②研修日程数(ケースカンファレンス及びグループディスカッション)	4回	3回	3回	2回

注記:研修は同一内容

インテンシブ・インタビュー調査(2017年7月実施)

不満や悩みの状況にあると判断した大学2年生10名を多様な入試枠別に抽出

(1)総合アセスメントの結果の意味を確認する

(2)自己省察力・情報探索力・計画力の三つのキャリア開発力の現状を確認する

(3)面談結果の共通フォーマットに記録し次の一手を検討する材料とする

診断結果の例

学生A(アサーティブ入試以外の入学)
自己評価を低く見積もり、安易に妥協しやすい特性を確認した。「挑戦する環境を提供し、挑戦を通じて自らに対する自信を獲得していくような支援の必要性」を面談カルテに記載した。

根拠資料

- (1) 追手門学院「2016年度アサーティブプログラム・アサーティブ入試補助事業報告書、2017年6月.
- (2) ベネッセコーポレーション「大学教育再生加速プログラム (AP)テーマⅢ」中間レポート2017、2017年3月.
- (3) 追手門学院大学アサーティブ研究センター／ベネッセ教育総合研究所「『学びと成長の可視化』からその先へーアサーティブプログラム・アサーティブ入試の実証的研究で見えてきたことー」共同研究報告書、2018年3月.
- (4) アサーティブ研究センター紀要、第1号(2016) & 第2号(2018).